

会派視察・研修報告書

会派名 市民クラブ

代表者名 若尾 敏之

1 日 に ち	令和7年10月9日(木) 9時30分～16時30分
2 視 察 先 研修名、主催者及び会場	研修名：全国都市問題会議 主催者：全国市長会 会場：ライトキューブ宇都宮
3 参 加 者	若尾 敏之
4 調査研修の テーマ	成熟社会の都市のかたち ～ コンパクトで持続可能なまちづくり ～
5 主な内容	<p>開会式</p> <p>基調講演：京都大学名誉教授 武井良典 氏</p> <p>人口減少・成熟社会のデザイン</p> <p>人口は2008年をピークに減少しつつある。人口増加の時代は東京へ集中したが現在は逆の流れである。何故なら若い世代のローカル志向つまり愛郷心が拡大している。従って若い世代を支援する施策が必要となる。地元の進学率が44%も表れの一つである。</p> <p>現在は一極集中から小極集中へ、そして多極集中へと変化している。</p> <p>主報告：栃木県宇都宮市長 佐藤栄一 氏</p> <p>宇都宮市の持続可能なまちづくり</p> <p>市域の約8割が平坦な地形という地域の特性を背景に、中心市街地から人口増加に伴ってまちを郊外に拡散してきた。市街地の外延化の進行により、都市機能や居住の密度低下が生じ、中心市街地の活力低下や空き家・空き地の増加、地域コミュニティの衰退などの問題が懸念されている。</p> <p>平成19年の第5次宇都宮市総合計画基本構想において、ネットワーク型コンパクトシティを長期的なまちづくりの方向性として全国に先駆けて位置づけされた。平成26年度に2050年を見通したネットワーク型コンパクトシティ形成ビジョンを策定し、市民と将来の年のイメージを共有し、理解と協力を得ながらまちづくりを進めている。</p> <p>減少人口10万人を5万人減にとどめ、100年先も発展し続けられるまちを実現するため、長期的な視点で取り組みを進めている。</p> <p>一般報告：東洋大学国際PPP研究所 南 学 氏</p> <p>「縮充」発想による公共施設マネジメント</p> <p>縮充とは小さくても充実していることである。資材費、人件費高騰の影響が出て財源が無い、すると手が付けられず老朽化が進む。そこで縮充が</p>

<p>5 主な内容</p>	<p>力を発揮する。公民館、体育館となると館で考えなければならず、大きい箱ものとして捉えなければならない。しかし用途や競技種目に合った部屋を作れば、目的別の施設として使用出来る。正に縮充である。それが一番適した施設と言えは小学校である。小学校の児童がいない時間に、他の団体が使用出来れば施設としての数を減らす事が出来、固定費削減にもつながる。</p> <p>一般報告 : 香川県高松市長 大西 秀人 氏</p> <p>都市縮小時代の持続可能なまちづくり</p> <p>丸亀町に見る都市の再生と自立性</p> <p>高松市長から丸亀町商店街再生のお話を聞きました。丸亀町商店街へは2度行政視察をしており、その実績を目の当たりにしてきました。それを裏付けるお話でした。</p> <p>コンパクトシティ（歩いて暮らせるまち）の取り組みは、類を見ない取組であり、ここの整備が町全体に広がっていった。</p> <p>一般報告 : 早稲田大学理工学術院教授 森本 章倫 氏</p> <p>次世代交通とコンパクトで持続可能なまちづくり</p> <p>人口減少社会において都市のコンパクト化は望ましい政策の1つであるが、現行の都市計画制度の中で効果的に機能するかは不明瞭な点が多い。</p> <p>コンパクト化政策を効果的に進めるためには、従来の都市計画制度に加えた立地誘導策が必要である。コンパクトシティを推進する交通戦略として、集約エリアでは徒歩を中心にウォークアブルなまちづくりを目指す。</p> <p>都市内の移動には次世代型路面電車システム（LRT）、快速バスシステム（BRT）、自動運転バスなどの定時制と利便性を備えた次世代公共交通を導入する。郊外部の非集約エリアでは自転車やパーソナルモビリティなどを活用しつつ、ライドシェアできる自動運転車を先行的に導入する。</p> <p>子どもや免許を返納した高齢者の日常の足となるロボットタクシーとしての活用が期待される。郊外に住む人の移動手段を確保しつつ、都心部を魅力的な空間へと再生できるかが重要である。集約エリアを新しい居住地として選択する人が増えればコンパクト化は徐々に進行する。</p>
<p>6 所感、提言事項 課題等</p>	<p>諸先生のお話を聞くことが出来ました。特に印象に残ったのが、宇都宮市の佐藤栄一市長のお話でした。やはり、実践に伴う話は真実味にあふれ、苦勞された点、100年先を見据えた施策をお聞き出来たのは我々が、取り組む姿勢の目安となると感じました。また、人口減少に対して少しでも緩和する取り組みも大切な事と理解しました。</p>

1 日 に ち	令和7年10月10日(金) 9時30分～12時00分
2 視 察 先 研修名、主催者及び会場	研修名：全国都市問題会議 主催者：全国市長会 会場：ライトキューブ宇都宮
3 参 加 者	若尾 敏之
4 調査研修の テーマ	①成熟社会の都市のかたち ～ コンパクトで持続可能なまちづくり ～
5 主な内容	パネルディスカッション
	コーディネーター： 埼玉大学大学院教授 内田奈芳美 氏
	成熟社会の中で現実的なコンパクトシティのあり方と接続可能な公共サービスの提供について、ウォークブルなまちづくりの実践と移動自体を楽しむことが、機能的充足性+分配的合理性+感情的納得性を生み出す。移動をしたい時に移動が出来、幸せな生活を送れる為にはどうしたら良いかなどの疑問を解決していく事が重要である。
	パネリスト： 関東自動車社長 吉田 元 氏
	国の重点施策となっている「コンパクト・プラス・ネットワーク」によるまちづくりは、拠点を面的に再編し、公共交通で結ぶことにより利便性と持続可能性の両立を目指すことである。このようなまちづくりは、交通事業者と行政の協力が不可欠であり、地域の生活拠点（居住・就業・医療・福祉など）と交通を一体として整備することで誰もが安心して移動出来る環境を整備することが出来る。公共交通は生活を維持する「生命線」であり、移動手段の確保は地域における「暮らしの質」の根幹を成している。持続可能なまちづくりには交通分野での脱炭素化も重要で、自家用車依存からの転換が求められている。
	パネリスト： まちなか広場研究所主宰 山下 裕子 氏
	「いくつになっても」「出かけていけ」「出かけたがたい」都市について事例をいくつか挙げられました。
	★青森県八戸市・毎週日曜日 館鼻岸壁朝市
	日本最大級（約300店舗）が立ち並ぶ朝市
	歩行補助車を愛用しながら自らの足で自宅から出掛け、顔見知りとおしゃべりし、見ず知らずの旅人ともふれあい、品物が売れてお小遣いできたなら自分の欲しい物を購入して帰宅する。

☑ 鳥取県米子市皆生 ぐるぐるかいけ

5 主な内容	60mグリッドで歩きやすく整備された信号が無い、自転車やベビーカーや
--------	------------------------------------

	<p>散歩するなど移動形態が異なっても一定のゆっくりとした速度での往来が盛んである。</p> <p>☑ 鳥取県米子市循環バス だんだんバス</p> <p>米子駅から米子駅まで（どこにも行かない）150円で50分、車内はエアコンが効いていて歩くには勇気のいる距離をゆっくり巡る。</p> <p>☑ 滋賀県甲賀市 杣川夏まつり</p> <p>パネリスト ： 北海道室蘭市企画財政部長 高橋 知規 氏</p> <p>有数の工業都市である室蘭市は最盛期は16万人有った人口も現在は7万4千人と激減している。学校の統廃合も半減する中、「コンパクトなまちづくり」を目指し立地適正化計画で2つの中心市街地を都市機能誘導区域として設定し、重点的に整備・活性化を図るなど、医療・福祉・商業施設の誘致や整備を進めている。</p> <p>パネリスト ： 鳥取県米子市長 伊木 隆司 氏</p> <p>バイパスの開通で郊外に人が流れたことで中心市街地の衰退が始まった。そこで公共交通の利便性向上と徒歩でも移動出来る街を作り直す事がまちづくりに大切であるとの認識から「歩いて楽しいまちづくり」を展開するようになった。米子駅の改修によるアクセス性の向上策や、まちなかウォークアブル推進事業によるハード整備と商店街によるイベント開催などのソフト事業を組み合わせ、中心市街地を「歩いて楽しいエリア」と感じてもらえるような取組を進めている。</p>
6 所感、提言事項 課題等	<p>まちなかの「パブリック・ライフ」の再考：成熟社会におけるコンパクトな都市を考える上で、をテーマに埼玉大学の内田教授がパネリストとなり4人のパネラーの方が、それぞれ意見を述べられました。</p> <p>関東自動車の吉田社長からは具体的なお話を聞き、まちなか広場の山下主宰からは事例を交えたわかりやすい情報をお聞かせ頂きました。室蘭市の高橋部長と米子市の伊木市長からは具体的なお話で、特に伊木市長からは歩いて楽しいまちづくりについてお聞きしました。</p>
7 写真等 ※視察の場合は必須 研修の場合は任意	

1 日 に ち	令和7年10月10日(金) 13時45分～15時45分
2 視 察 先 研修名、主催者及び会場	研修名：全国都市問題会議 主催者：全国市長会 会場：表参道スクエア、日環アリーナ栃木
3 参 加 者	若尾 敏之
4 調査研修のテーマ	行政視察 プロスポーツチーム連携事例
5 主な内容	<p>プロバスケットチーム、宇都宮ブレックスの藤本社長から、チーム結成からの歩み、現在の活動状況などをお聞きしました。</p> <p>宇都宮ブレックスはBリーグで昨年3度目の優勝をされており、全国的にも有名なチームです。社長からは立ち上げの時の苦労（特に市民への周知）をお聞きしました。丁寧な説明と実績から今では多くの市民から愛されホームだけでなく、アウェーでも多くの市民が駆けつけてくれるそうです</p> <p>講和後、ブレックスアリーナ宇都宮を見学させて頂きました。</p> <p>とても広大な敷地内に立派なアリーナはまさに日本を代表するチームが試合するに相応しい会場でした。</p> <p>会場では次の日行われる公式戦に向けて、選手は調整、スタッフは準備に忙しく動いておられました。</p>
6 所感、提言事項 課題等	<p>私が今回視察させて頂いた理由は、全国で戦うチームを企画運営するノウハウや、規模について目の当たりにしたいという気持ちが有ったからです。最初は苦しかった立ち上げも後に市民に愛されるチームに育てる為のご苦労をお聞き出来たのは大変な収穫でした。</p> <p>現在、多治見市にはJリーグ参入を目指したチームが立ち上がり、日々努力しています。我々はこのようなチームの為に何が出来るか、また何をすれば良いのか模索中です。そういった意味では、まだまだ先の話ではありますが、一筋の光明が見えた気がしました。</p> <p>特に地域との関わりについては、当初の苦労が報われると信じて邁進する気持ちが大切だと感じました。</p> <p>この視察には、多くの市長も参加されており、桑名市の伊藤市長とは市に持ち帰る良い懇談が出来ました。</p>

7 写真等
※視察の場合は必須
研修の場合は任意

